

## 杉並区における子育て支援施設利用の実態と課題

### A Study of the Problems Surrounding the Utilization of Child-Rearing Support Facilities in Suginami City in the Present

住居学科 正田 小百合 佐藤 克志  
Dept. of Housing and Architecture Sayuri Shoda Katsushi Satoh

**抄 録** 平成 27 年度から『子ども・子育て支援新制度』が開始された。それに関連し子育て支援施設の再編を計画している杉並区を対象に、児童館で実施されている乳幼児親子向けプログラム『ゆうキッズ』参加者に子育て支援施設利用や地域生活の移動の課題を明らかにするためのアンケート調査を行った。その結果として、小学校区単位に設置され徒歩で通える児童館は乳幼児親子の交流の場として有効活用されていること、地域内移動は徒歩や自転車が多いこと、もともと児童が使うことを想定して建てられた児童館での授乳室対応やベビーカーの置き場に苦慮していること、男性保護者も育児参加をするようになってきている中での育児の現場に男性が入ることへの困惑などがあることがわかった。

キーワード：

キーワード：子育て支援、児童館、父親の育児参加、授乳室、ベビーカー

**Abstract** The “Comprehensive Support System for Children and Child-rearing” began in 2015. We conducted a survey of infants and parents, asking them about how they utilized child-rearing support facilities at the children’s hall in Suginami city and what difference these facilities made to their lives. The hall was set up for every elementary school student living within walking distance. The results show that infants, elder children and parents utilized the hall as a place of interest, and that such users moved around their local area mainly by walking or via a bicycle. Both the infants and parents that used the facilities and the staff that ran it were embarrassed about using the nursing room and parking places for strollers and felt slightly uncomfortable about fathers using the resources.

**Keywords:** child-rearing support, children’s hall, father’s participation in childcare, nursing room, stroller

### 1. 研究の背景・目的

近年、保育所入所や学童保育の「待機児童」の問題が大きくなっているが、家庭でひきこもり状態になってしまう親子の支援も核家族の多い都市部では重要課題となっている。このような社会的課題を背景として、平成 27 年 4 月から全国の市区町村を実施主体として『子ども・子育て支援新制度』<sup>1)</sup>が始まり、地域の中ですべての子どもと家庭に対する子育て支援の質と量の充実が図られようとしている。新制度では、幼稚園・保育園・認定こども園等の充実を図るだけでなく、子育てをする保護者が地域子

育て支援拠点でさまざまな相談をすることができるようになることが期待されている。

従来からの地域の中での子育て支援の場である児童館は、『児童館の設置運営について（昭和 53 年厚生省児童家庭局長通知）』<sup>2)</sup>ではおおむね 3 歳以上の幼児から小学校 3 年までの児童を対象として設置されていたが、『児童館の設置運営について（平成 2 年厚生省児童家庭局長通知）』<sup>3)</sup>により「対象となる児童は、すべての児童とする」と記載されるようになった。そして現在では、『児童館ガイドライン』（平成 23 年厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）<sup>4)</sup>において「18 歳未満のすべての子どもを対象

とし、遊び及び生活の援助と地域における子育て支援」をその運営の目的としている。しかし、ある程度成長した児童を対象として造られた建物が乳幼児の子育て支援として活用されるには使い勝手の悪さもあると考えられる。

そこで本研究では乳幼児の保護者を対象として子育て支援施設利用の実態調査を行い、現段階での施設の課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 調査概要

### 2-1. 調査地域概要

本研究では、各小学校区に小型児童館のある東京都杉並区を対象地域とした。杉並区は他の自治体に先駆けての『ゆう杉並』のような中高生を対象とした児童館や、子育て応援券の導入などから比較的子育てしやすい街という印象を持たれていた。しかし近年では保育所の待機児童の問題や高齢者施設の不足、また施設の老朽化などを鑑みた施設再編整備計画<sup>5)</sup>が検討され、児童館の再編や継承される子育て支援施設の事業展開が計画されつつある。

また、0歳から6歳の子のいる世帯を対象として平成25年度に行われた『杉並区子育て支援に関するニーズ調査』<sup>6)</sup>によると、父親の帰宅時間の回答があった2,260人のうち、約半数は午後8時台から10時台に帰宅している。育児で最も忙しい時間帯に父親不在で家事や育児をこなしている母親が多いということは、母親のストレスも増大していることが予想される。

杉並区では地域を構成する単位として7地域を設定し、これを施設の規模及び配置を定める場合の基準にしておき<sup>7)</sup>、児童館もこれまではそれに基づいて設置されていた (Table 1)。これらの児童館の多くは建設から30年以上経過しているものもあり、多くは乳幼児期ではない児童が利用することを想定して建てられている。

Table 1 杉並区の現行の地域ブロックと設置児童館

ブロック	1	2	3	4	5	6	7
地域児童館名	和泉	堀ノ内東	成田西	荻窪北	善福寺	四宮森	高井戸
地区児童館名	大宮・堀ノ内南・松ノ木・方南	高円寺北・高円寺東・高円寺南・高円寺中央・和田中央	天沼・成田・阿佐谷・馬橋・阿佐谷南	宮前・荻窪・宮前北・松庵・西荻南	西荻北・上荻・今川・上井草・善福寺北	桃井・本天沼・井草・下井草・東原	上高井戸・高井戸西・永福南・下高井戸・浜田山

杉並区の施設再編整備計画では乳幼児はその地域ブロックの中で施設数が再整備される児童館や子ども・子育て支援新制度で謳われる地域子育て支援拠点の整備の一環として保健センター内に新設される子どもセンターへ、学童保育は放課後等居場所事業の整備が整った地域の小学校内へ、という方針が示されている。子どもセンターは当面は保育施設の利用相談や産前・産後ヘルパーの申し込み、その他子育て支援に関する相談の窓口としての役割が中心となるが、施設再編整備計画の実行が進捗していけば、児童館から再編されて子どもセンターとなる施設が増え、乳幼児親子の交流の場の整備も進んでいくものと見られる。

そこで今回の子育て関連施設の再編整備計画が進められている当該地域で施設再編前の利用者の状況やニーズを把握するための調査を実施した。

### 2-2. アンケート調査概要

調査は杉並区児童館で行われている「ゆうキッズ」(主に平日午前中に乳幼児の年齢別に開催されている親子対象のプログラム)利用者を対象とした調査①と「ゆうキッズ」担当職員を対象とした調査②の2種類を実施した。アンケート調査概要をTable 2に示す。

Table 2 調査概要

	調査①	調査②
調査期間	平成26年7月1日～3日	平成26年12月の1か月間
調査対象	杉並区児童館・工事中の1館を除く40館の「ゆうキッズ」利用者	杉並区立全児童館の「ゆうキッズ」担当者
調査方法	アンケート用紙配布・郵送にて回収。952通配布、358通回収(回収率38%)、有効回答数352通(配布数37%)。	アンケート用紙メール送付、区担当者経由にてメール返送。41館に配布、36館から回答(回収率87%)。
調査項目	回答者属性、児童館の利用について(通所方法・所要時間・利用時間帯・来館理由等)、保健センター利用時の不便(道路・館内)、一時保育・ひととき保育・つどいの広場の利用について(認知実態等)、子育て支援施設全般について(重視してほしいもの、ベビーカー利用時の地域公共施設の不便)	男性保護者の来館頻度・プログラムへの参加の有無、授乳コーナーの配慮状況、その他男性利用について

### 2-3. 回答者属性の特徴

子の数と職業について回答のあった利用者の状況をTable 3に示す。子の数が1人と回答している人が全体の7割を超え、初めての子育ての交流の場として児童館を利用している人が多いことがうかがえる。また、子が4人の層では調査時点で有職者の母親はいなかった。世帯に年齢の近い子の数が増えて

くると母親が働きにくくなるのかは今回の調査では明確にはなっていないが、今後の研究課題としたい。子のそれぞれの年齢について未記入の人もいるため回答者全世帯の子の年齢状況把握は困難であるが、4人と回答している中には「未就園児が2人、幼稚園児が1人、小学校3年生が1人」という人もいた。なお、父親の就労状況についてはフルタイムという回答が98%（343人）を占めていたが、育児休暇中あるいは専業主夫という記入が1人ずつみられた。

Table 3 回答者・母の就労と子の数（N=345）

	1人	2人	3人	4人	合計
フルタイム	5	6	0	0	11
パート/アルバイト	8	1	3	0	12
育児短時間勤務	3	1	0	0	4
育児休暇中	76	7	0	2	85
専業主婦	169	44	14	3	230
自営業	2	1	0	0	3
合計	263	60	17	5	345

「夫婦以外で育児をサポートしてくれる家族が30分以内で来られる場所に住んでいるか」「家族以外で育児をサポートしてくれる知人・友人・近隣の人が近所にいるか」という設問についての回答をTable 4に示す。“専業主婦で近い所に夫婦以外の家族や育児サポーターがいない人たち”が339人の回答者の中で最も多い107人（32%）となっており、これらの人たちが「ゆーキッズ」のプログラムを利用する層の主流と考えられる。

Table 4 母就労状況と支援者（N=339）

			第三者の育児サポーター		合計
	いる	いない	いる	いない	
近所に夫婦以外の家族	フルタイム	いる	1	1	2
		いない	2	6	8
	パート/アルバイト	いる	3	4	7
		いない	1	4	5
	育児短時間勤務	いる	1	1	2
		いない	0	2	2
	育児休暇中	いる	12	18	30
		いない	9	44	53
専業主婦	いる	35	45	80	
	いない	40	107	147	
自営業	いる	0	1	1	
	いない	0	2	2	
合計			104	235	339

### 3. 子育て支援施設への移動について

#### 3-1. 児童館への移動手段と所要時間

「徒歩で児童館に来る」と回答した利用者がすべての地域ブロックで多かった（Fig. 1）。

自宅から児童館までの移動時間として何分以上が遠く感じるかという設問では、「親子で徒歩移動」の場合16～20分以上と回答した人がどの地域ブロックも多かった（Fig. 2）。

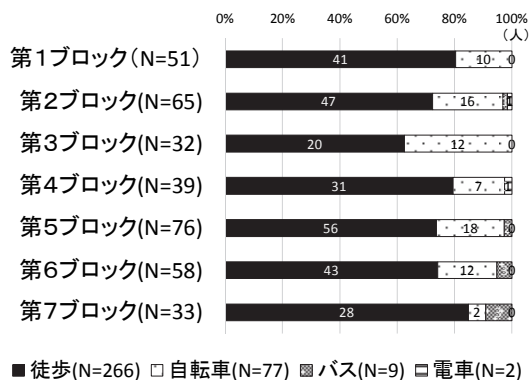


Fig.1 児童館への交通手段（複数回答/N=354）

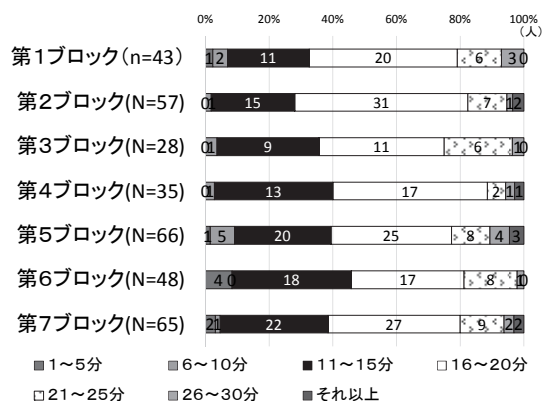


Fig.2 自宅から児童館まで何分以上が遠く感じるか（親子で徒歩/N=342）

#### 3-2. 保健センターへの移動手段

「乳幼児健診などの際に利用することのある保健センターには自宅からどのように行くか」という設問では、ほとんどの地域ブロックで「徒歩のみ」、次いで「自転車」と回答した人が多かったが（Fig. 3）、中央線北側エリアの居住地域から南側の保健

センターに行くために荻窪駅周辺の移動が関係する第6ブロックでは「徒歩とバス」の回答者が一番多かった。第6ブロックの荻窪駅周辺は鉄道が立体化になっていない。そのため自転車で線路を越えるには駅近くの地下道か環状八号線のアンダーパスを通ることになり、子どもを乗せた状態での自転車走行がしにくいことがその理由と推察される (Fig. 4)。

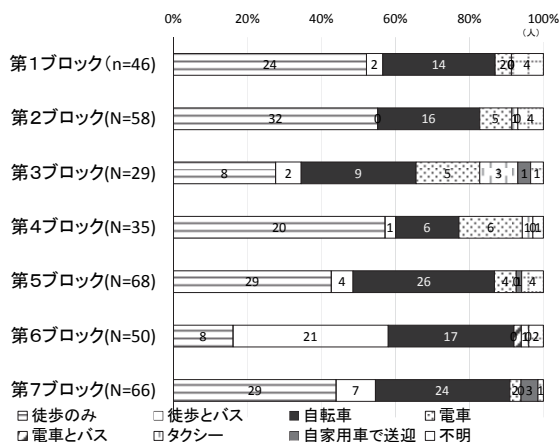


Fig.3 保健センターまでの交通手段 (N=352)



Fig.4 環状八号線アンダーパスの写真

### 3-3. 少し離れた場所への移動方法

前項の結果からは、地域内での移動の際には自転車を多く利用していることが推察できる。子どもも乗せ自転車を使っている人に対して、「区内のちょっと離れた街に行く場合どの移動方法が一番多いか」と聞いた結果を Fig. 5 に示す (子どもが1人の場合には自転車を利用したことがない人が多かったため、

子どもが2人以上いる人の回答を対象とした)。

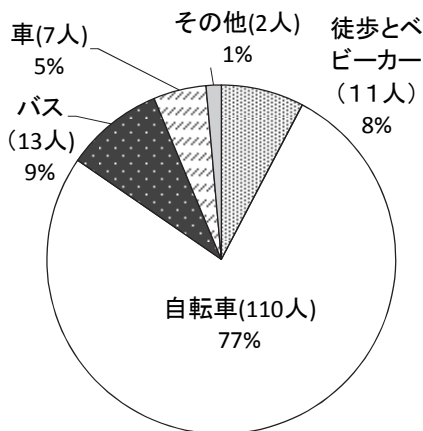


Fig.5 少し離れた所への移動方法 (N=143)

回答者 143 人のうち、自転車と回答した 110 人 (77%) に、さらに自転車利用のもっとも強い理由を尋ねたところ、「自転車の方が早い」「バス停の位置が中途半端」といった回答が多かった (Fig. 6)。また、自転車を使う理由のコメントとして、「公共交通で気遣うのが面倒」の他、「子どもが嫌がらずに乗る」「上の子の手を引きながらベビーカーを押すのは大変」「子どもが寝てしまうとベビーカーをたためない」といった意見が寄せられた。

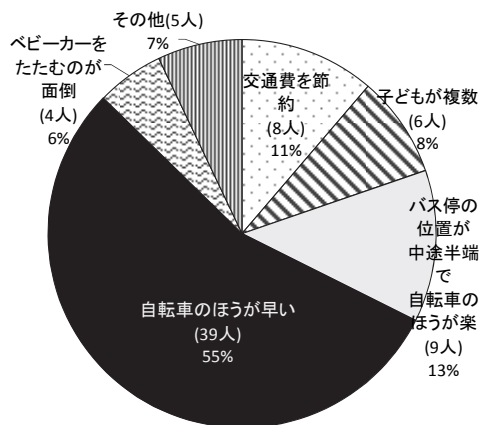


Fig.6 自転車利用のもっとも強い理由 (N=73)

#### 4. 子育て支援施設の利用について

##### 4-1. 児童館の利用状況

児童館を利用する頻度は「週数回」と回答した人が多かった (Fig.7)。

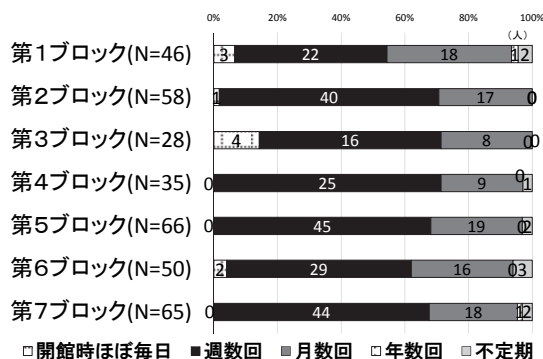


Fig.7 児童館利用頻度 (N=348)

自分が住む地域の児童館への来館理由を複数回答で答えてもらったところ「親子ともに様々な人と交流できる」が最も多く (全回答者の 80%)、「家から近い (同 68%)」、「お金をかけずに遊べる (64%)」が続く (Fig.8)。

一方、自分の住む地域以外の児童館に行く理由は「企画がいい (同 37%)」「友達がいる/作りやすい (37%)」「職員の対応がいい (26%)」が上位 3 つの意見であった。児童館のプログラム等のソフト面が遠くからでも来る理由になっていることがうかがえる (Fig.9)。



Fig.8 自分が住む地域の児童館への来館理由 (複数回答/N=2001)

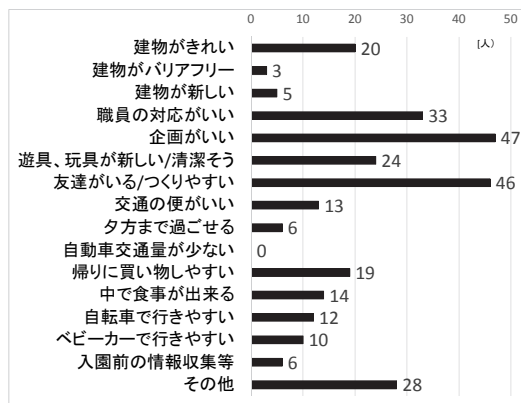


Fig.9 遠くの児童館への来館理由 (複数回答/N=286)

##### 4-2. 児童館の授乳スペースについて

児童館利用者アンケートの自由記述の中に、「児童館に授乳スペースがないために男性家族には来てもらいにくい」という意見があった。児童館職員への調査②によると、児童が使用するための建物として造られているため授乳室の用意が難しい児童館もあることがわかった (Fig.10)。

また、カーテンをつけたりして授乳スペースの対応をしている館が 16 館あった (Fig.11, Fig.12)。

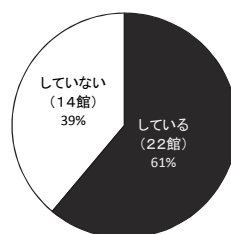


Fig.10 児童館での授乳スペースの有無 (N=36)

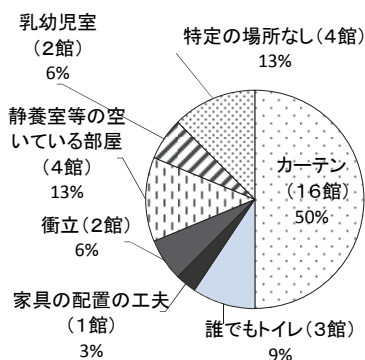


Fig.11 児童館での授乳スペースの対応 (N=32)



Fig.12 授乳スペースの一例 (下井草児童館)

### 4-3. 「ひろば型」施設について

地域子育て支援拠点事業の「ひろば型」(杉並区では「つどいの広場」)は、児童館の空白地帯での交流の場としての活用が期待されている。しかし利用者が少ないという評判があったことから、使わない理由を尋ねたところ、「制度を知らなかった」「児童館で間に合っている」「家の近くにない」「料金がかかる」という意見が寄せられた (Fig. 13)。

杉並区については各小学校区に児童館があり、無料で利用出来る子どもの遊び場として定着していることもある。また区内には 11 の常設のつどいの広場があるが、児童館に対して設置数が少ないという状況もある。しかし、回答者の数は少ないながら、つどいの広場を使う理由を見ると (Fig. 14)、ひろば型ならではの家庭的な良さや親近感を感じて行く利用者もいることがうかがえる。コメントの中には快適さや玩具の清潔さがよいとする意見の他「スタッフが相談に乗ってくれる」と書かれているものもあり、多様な子育て支援の場の1つの選択肢として利用者からの認知が拡がり、地域の居場所としてより有効に活用されていく事が期待される。

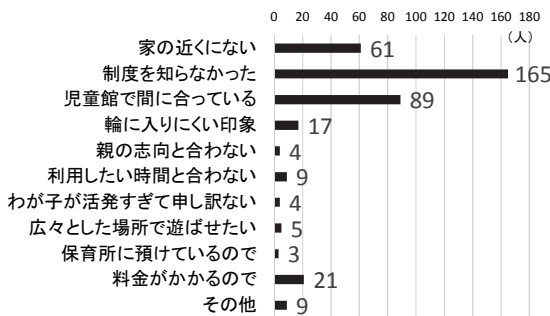


Fig.13 つどいの広場を使わない理由 (複数回答/N=387)

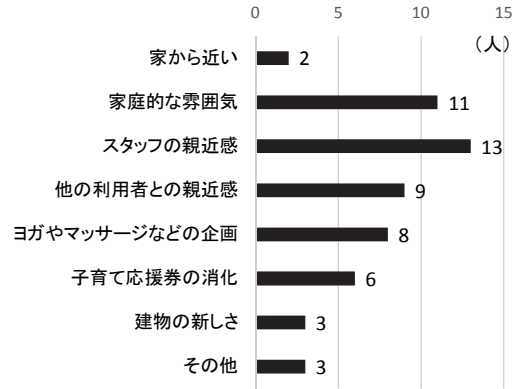


Fig.14 つどいの広場を使う理由 (複数回答/N=55)

### 4-4. 子育て支援施設の男性利用について

今後は男性が育児休暇を取得する家庭が増えることも予想されるため、男性が地域の子育て支援施設を利用することについての意見を聞いた。その結果として、子連れ利用ができる男子トイレの整備等の希望等、ポジティブな意見が多かった反面、数は少ないながら、授乳の際の場所の気遣いなど、これまで女性中心だった育児の現場に男性が入ってくることへの困惑 (男性が授乳室に入ること・男性参加を気にする、男性はプログラムに参加すべきでない等)を感じている人もいることがわかった (Fig. 15)。

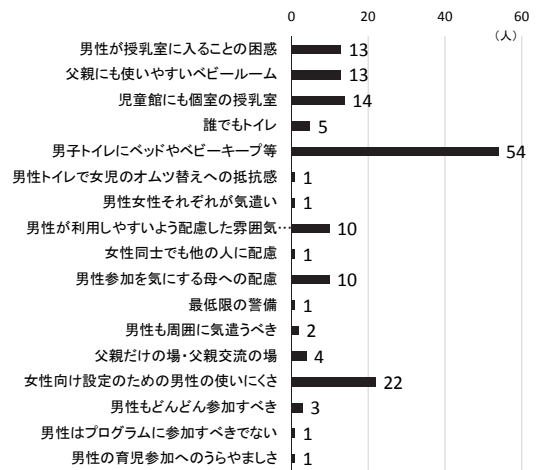


Fig.15 子育て支援施設の男性利用に関する意見 (N=156)

児童館職員へのアンケートでは、「父親向けのプログラムや玩具 (4 館)」「声掛け・案内 (3 館)」

「お父さんたちも過ごしやすいのんびりした空間環境（1館）」などの対応をしている館もあった（Fig. 16）。

また、男性保護者来館のときの子どもの数を職員に尋ねたところ、子どもが2人以上の場合はプログラムに参加している館が24館あり、世帯で子どもの数が増えてくると児童館の利用に慣れてくると思われる男性保護者もいることがわかった（Table 5）。

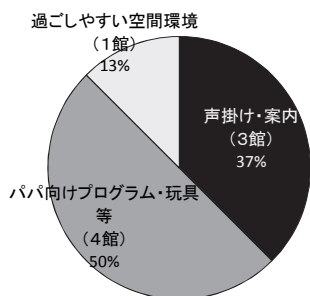


Fig.16 男性が施設利用時の対応 (N=8 単位/館)

Table 5 男性の来館時の形態 (単位/館)

	来館時の子どもの数	プログラム参加	
		あり	なし
	1人	4	0
	2人	24	5
	3人	2	0

#### 4-5. 子育て支援施設側に重視してもらいたいこと

子育て支援施設側に重視してもらいたいことについて優先順位をつけて挙げてもらった。1番目に重視してほしいこととして最も多かったのは「子どもの遊び場（76人・21%）」だったが、「施設のバリアフリー（58人・16%）」の要望数が2番目に多かった。また3番目には「施設の数（34人・9%）」が挙げられた（Fig.17）。

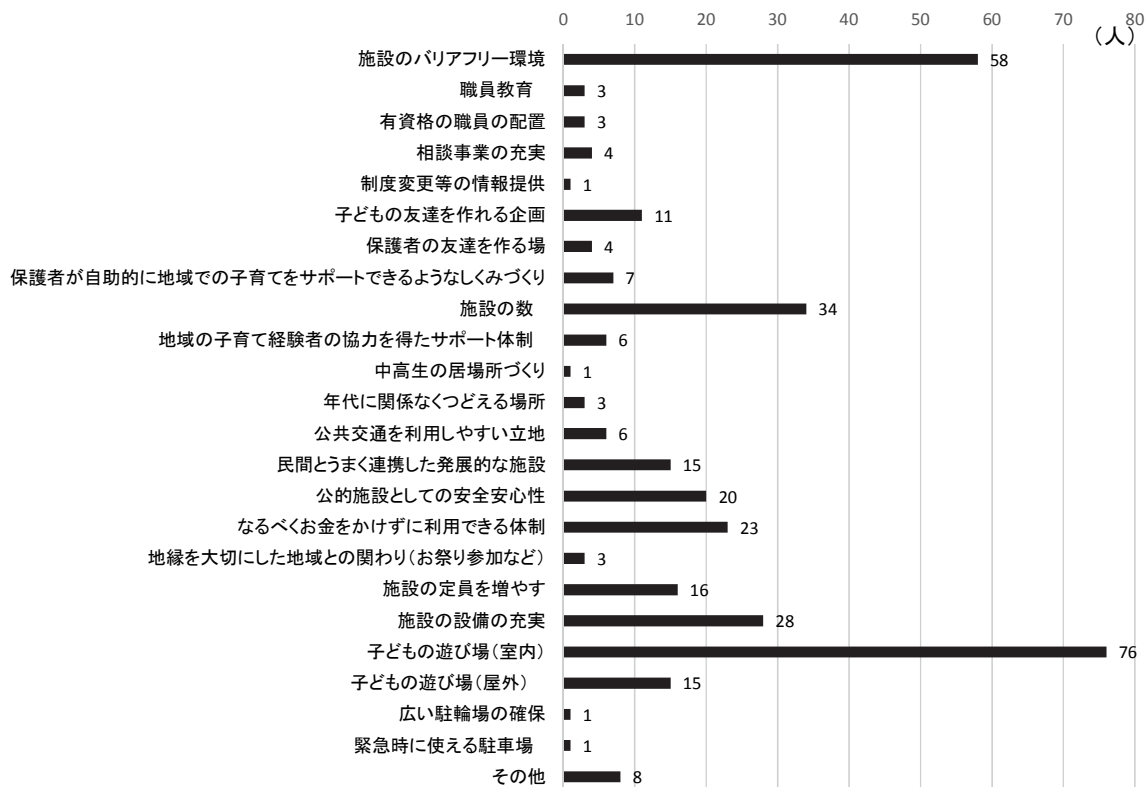


Fig.17 子育て支援施設に重視してもらいたいこと (複数回答/N=347)

#### 4-6. ベビーカー利用時の不便

児童館のみならず地域の公共施設でのベビーカー利用時の不便を自由に回答してもらった結果をFig.18に示す。施設内だけでなくアクセス面の不便な点も書かれており、エレベーターなどのバリアの他、ベビーカー利用に特化したバリアも多い。その

バリアとして、「建物内をベビーカーで移動できない」「置き場がない」「置き場に屋根がない」「買い物かごを持ちにくい」「一緒に入れるトイレがない」「盗難が心配」等などが指摘されている。また「抱っこしてやれという声」等の周囲の理解面の課題も挙げられた。

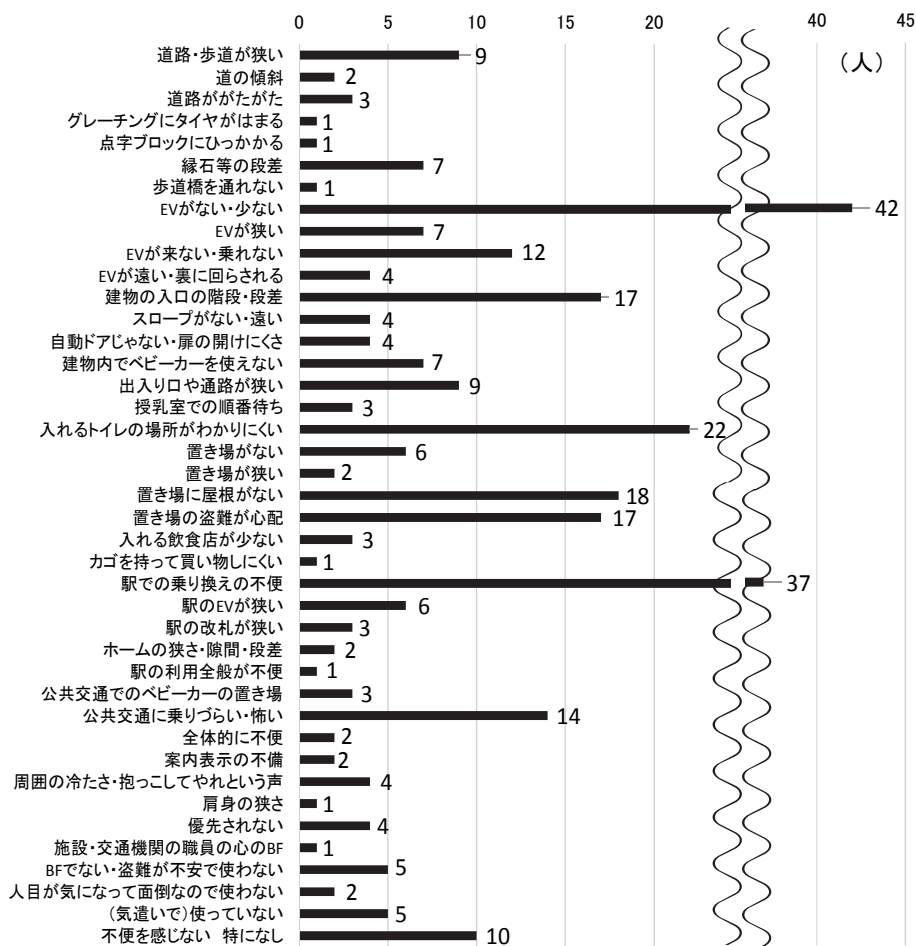


Fig.18 地域の公共施設のベビーカー利用時の不便 (複数回答/N=304)

#### 5. まとめ

本調査で明らかになったこととして下記のことが挙げられる。

- ・核家族世帯の専業主婦層が子育て支援の場としての児童館を活用する頻度は高い。
- ・駐車場確保の難しい東京区部では、徒歩圏にある屋内の子育て支援施設が求められる。

- ・駐車場確保の難しい地域では、乳幼児と一緒の外出(地域内移動)は自転車や徒歩が多い。
- ・児童が利用するものとして建てられた児童館では授乳室やベビーカー置き場のない施設が多く、現場では対応に苦慮している。
- ・母親中心だった育児の現場に男性保護者が参加するようになりはじめ、保護者の性差への配慮も必要になっている。



親子交流の場として徒歩で行かれる場所にライフスタイルの多様化で育児を担うのは母親だけという時代ではなくなってきている。男性保護者が利用しやすいような設備の整備が求められる他、出産直後のデリケートな母親をいたわる配慮も忘れてはならない。

今後は夫や祖父母にも利用しやすい子育て支援施設のあり方を研究していく予定である。

**【謝辞】** アンケート調査にご協力いただいた杉並区および児童館利用者みなさま、調査実施に協力していただいた吉地沙穂里氏<sup>8)</sup>（当時日本女子大学住居学科）に感謝の意を表します。

### 参考文献

- 1) 内閣府：子ども・子育て支援新制度なるほどBOOK（2014）
- 2) 厚生省児童家庭局長：児童館の設置運営について/昭和53年6月9日 児発第37号 各都道府県知事・各指定都市市長宛厚生省児童家庭局長通知（1978）
- 3) 厚生省児童家庭局長：児童館の設置運営について/平成2年8月7日 児発第967号 各都道府県知事・各指定都市市長宛通知（1990）
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長：児童館ガイドライン/平成23年3月31日雇児発0331第9号各都道府県知事・各指定都市市長・各中核都市市長宛通知（2011年）
- 5) 杉並区：杉並区立施設再編整備計画（第一期）・第一次実施プラン（2014）
- 6) 杉並区：杉並区子育て支援に関するニーズ調査（2013）
- 7) 杉並区個別外部監査人木下哲：杉並区区政資料平成25年度杉並区個別外部監査結果報告書「児童館」（2013）
- 8) 吉地沙穂里：地域の子育て支援施設・環境の利用実態と利用者ニーズに関する研究 ―杉並区の児童館、一時保育・ひととき保育・つどいの広場を対象として―、日本女子大学家政学部住居学科卒業論文（2015）